



大和川・今池遺跡

発掘資料 その4

第5地区

1979.12

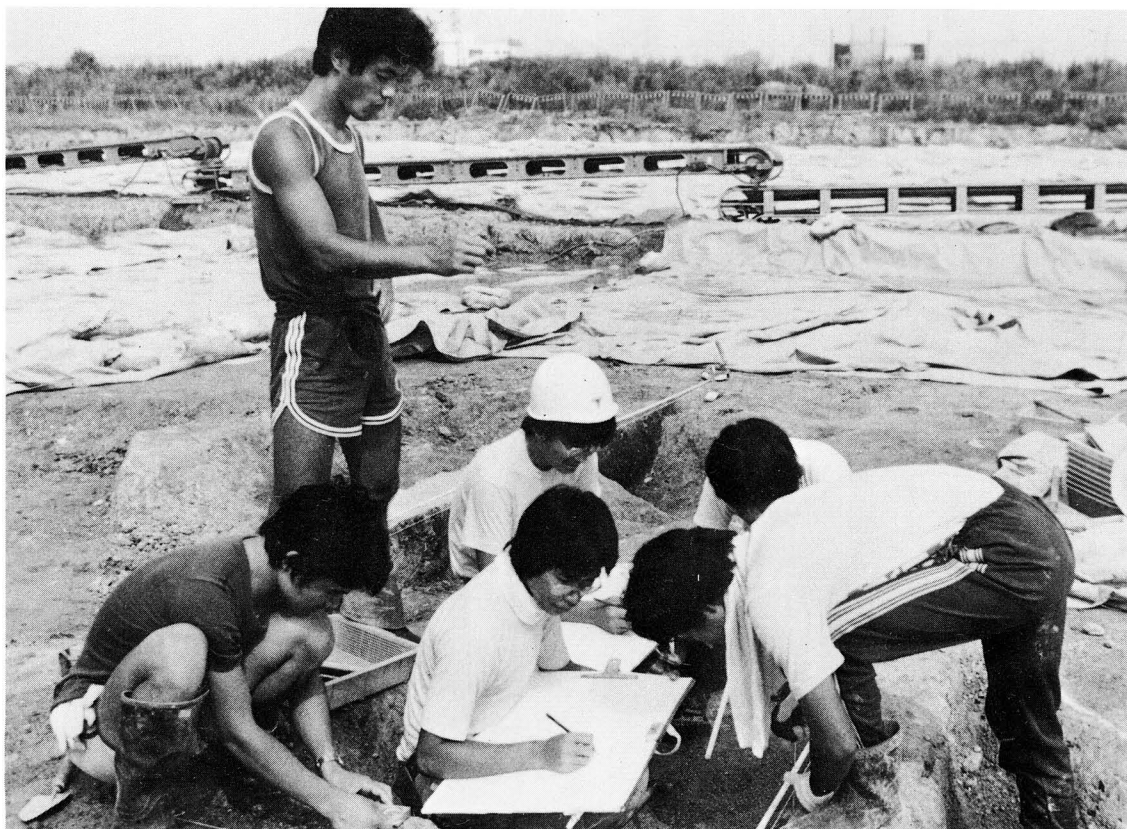
大和川・今池遺跡調査会

はじめに

大和川・今池遺跡は大阪府南部流域下水道今池処理場建設に伴う試掘調査で新たに発見された遺跡で、1978年4月より第1地区の発掘調査を開始してこれまでに6世紀代を中心とする集落跡を検出している。

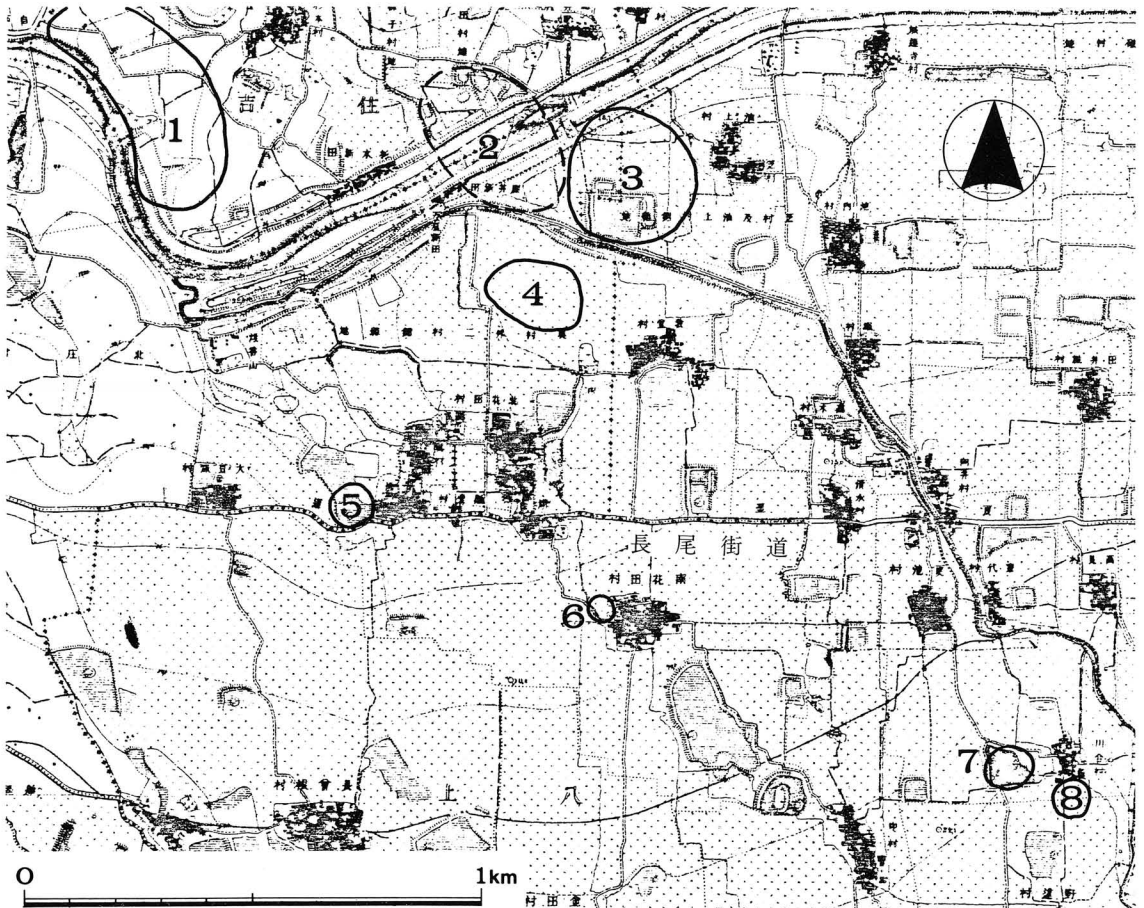
今回発掘調査を実施した第5地区は汚泥処理棟建設予定地約4000㎡であり、1979年6月25日着手し同年10月25日現場作業を終了した。調査は大阪府教育委員会・石神 怡、堺市教育委員会・奥田 豊の指導の下に、堺市教育委員会技術職員・森村健一、大阪府教育委員会技師・大野 薫、松原市教育委員会技師・足立俊彦の3名が担当し、多くの学生諸君の参加を得ることができた。また調査の実施にあたっては立命館大学教授・日下雅義氏、堺女子短期大学教授・嶋田暁氏、松原市史編さん室主査・出水睦巳氏、大阪府南部流域下水道事務所、堺市下水道部、松原市下水道部、地元各位から多大の御協力を得ることができた。ここに記して感謝の意を表したい。

なお本冊子は調査結果の速報であって報告書にかわるものではない。遺跡の総括的検討は報告書において果したい。



位置と環境

大和川・今池遺跡は大阪府堺市常盤町及び松原市天美西町に所在する。新大和川のすぐ南に位置し、現標高は約10mである。遺跡の広がりには十分確認されていないが、北は新大和川、南は西除川、東は府道矢田堺線、西は長池の東側あたりまでひろがっているようである。遺跡は泉北丘陵から上町台地につづく洪積段丘中位面の東縁に立地し、東側は旧西除川の氾濫原・谷底平野となっている。



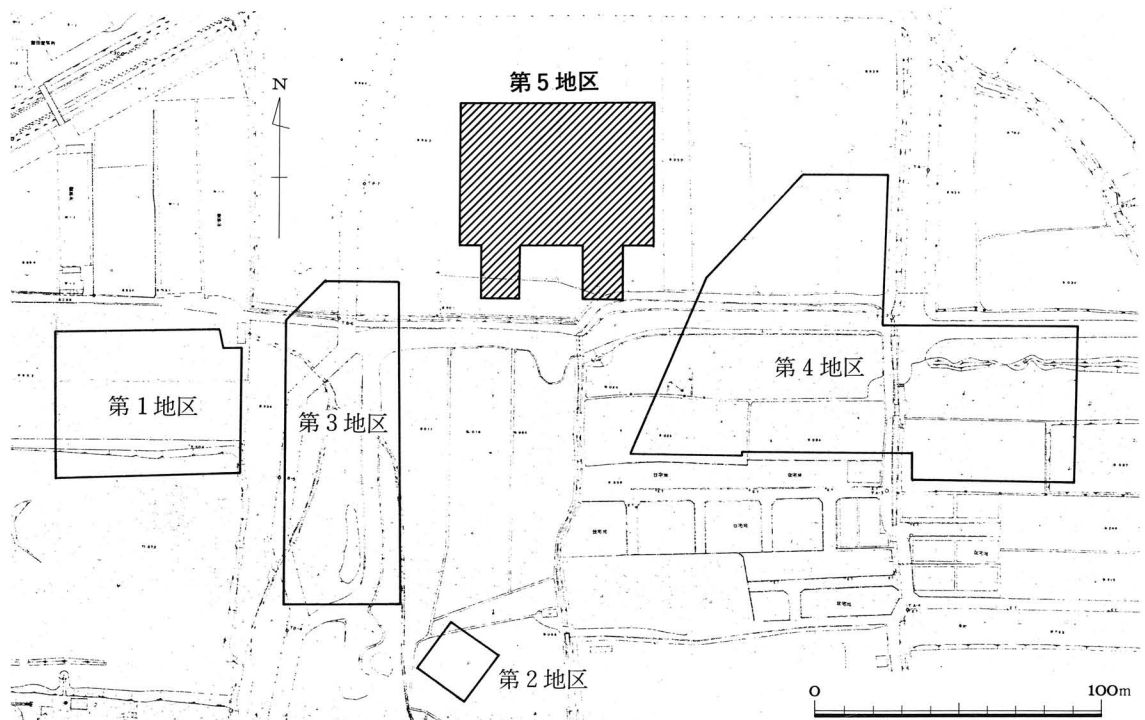
- | | | | |
|-----------|------------|-------------|----------|
| 1. 遠里小野遺跡 | 2. 依羅池(推定) | 3. 大和川・今池遺跡 | 4. 北花田遺跡 |
| 5. 今池遺跡 | 6. 南花田遺跡 | 7. 河合西遺跡 | 8. 河合遺跡 |

大和川・今池遺跡及び周辺遺跡

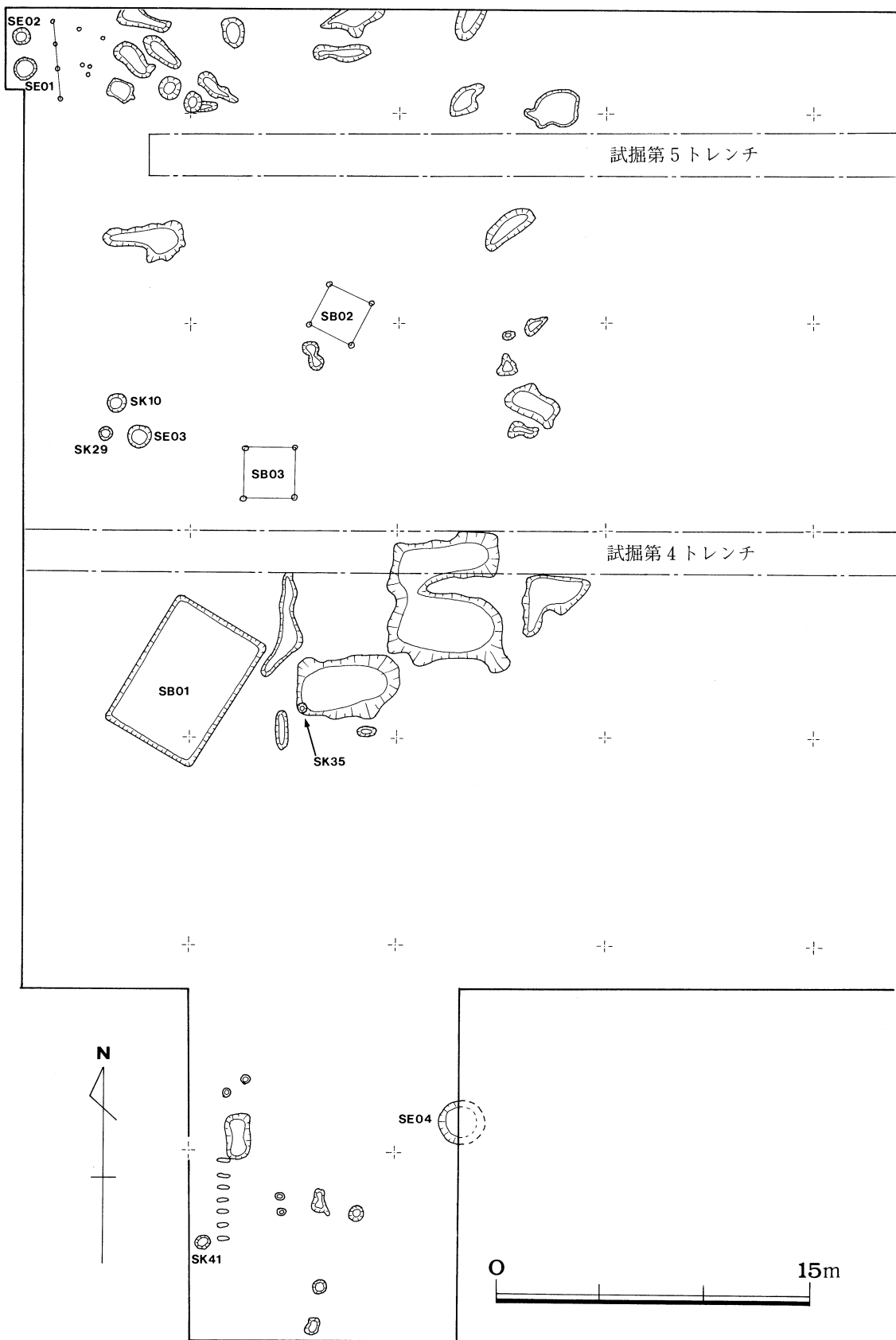
大和川・今池遺跡の立地する段丘の東縁では南東約3kmに弥生時代の河合遺跡が立地するのみで他は北方の桑津遺跡などが知られているのみである。大阪湾に面する段丘西縁では弥生時代～古墳時代の遠里小野遺跡があり、またさらに南方には百舌鳥古墳群がつづく東方では河内平野にのびている洪積段丘（瓜破台地）西縁に遺跡が立地している。先端部には学史上にも著名な瓜破遺跡、新大和川の南には古墳時代の三宅遺跡、さらに南へゆけば上田町遺跡などがみられる。南方約1kmを東西に走る長尾街道は岸俊男氏によって大津道と推定され、また難波宮からまっすぐ南下してこれと交わる古道があったとすれば、それは本遺跡の中を通ることになるのである。

調査成果

第5地区では古墳時代・奈良時代・近世の三時期の遺構を検出した。古墳時代の遺構は建物・井戸・柵列・土壇など集落関係のもので、奈良時代の遺構も同じく集落関係のものと考えられる。近世の遺構は井戸・杭列など、いずれも耕作にかかわるものである。以下順を追ってその概略を述べる。



第5地区位置図



第5地区遺構配置図(西半)

竪穴住居 (SB01)

隅丸長方形の平面形を持ち、長辺7.0~7.4m、短辺5.5m、地山面から切り込んでいるがかなり削平をうけていると考えられ、検出面からの深さは20cm前後である。主軸はN-41°-Eで後述するSB02と近い方向を持つ。床面上には紫灰色混り黄褐色砂質粘土を張っていた。この張床面においても地山面においても柱穴・周溝などは認められなかった。出土遺物は全般に少いが、土師器小片のみで須恵器を含まない。

掘立柱建物 (SB02)

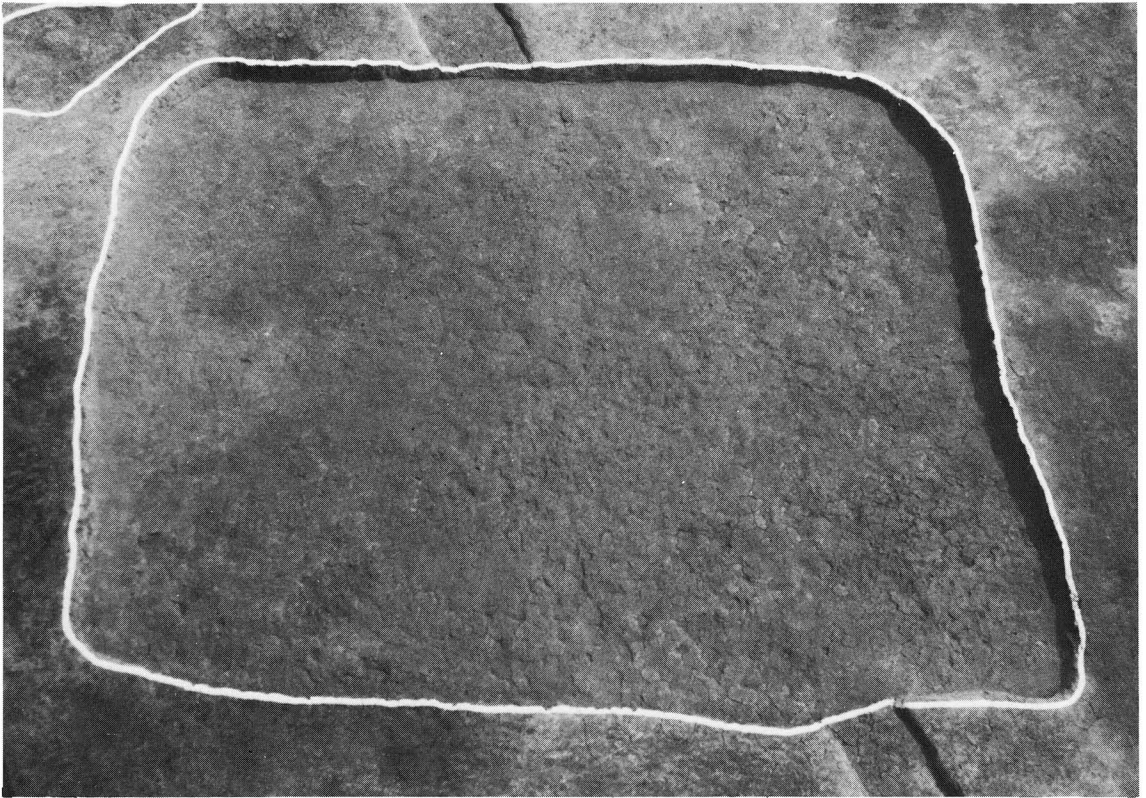
SB01の北約20mに位置する。1間×1間の掘立柱建物で、ほぼ正方形の平面形を持ち、その一辺は約2mである。1回の建替が認められ、新しい時期の建物の方が若干規模が大きくなっている。主軸はN-32°-Eである。

掘立柱建物 (SB03)

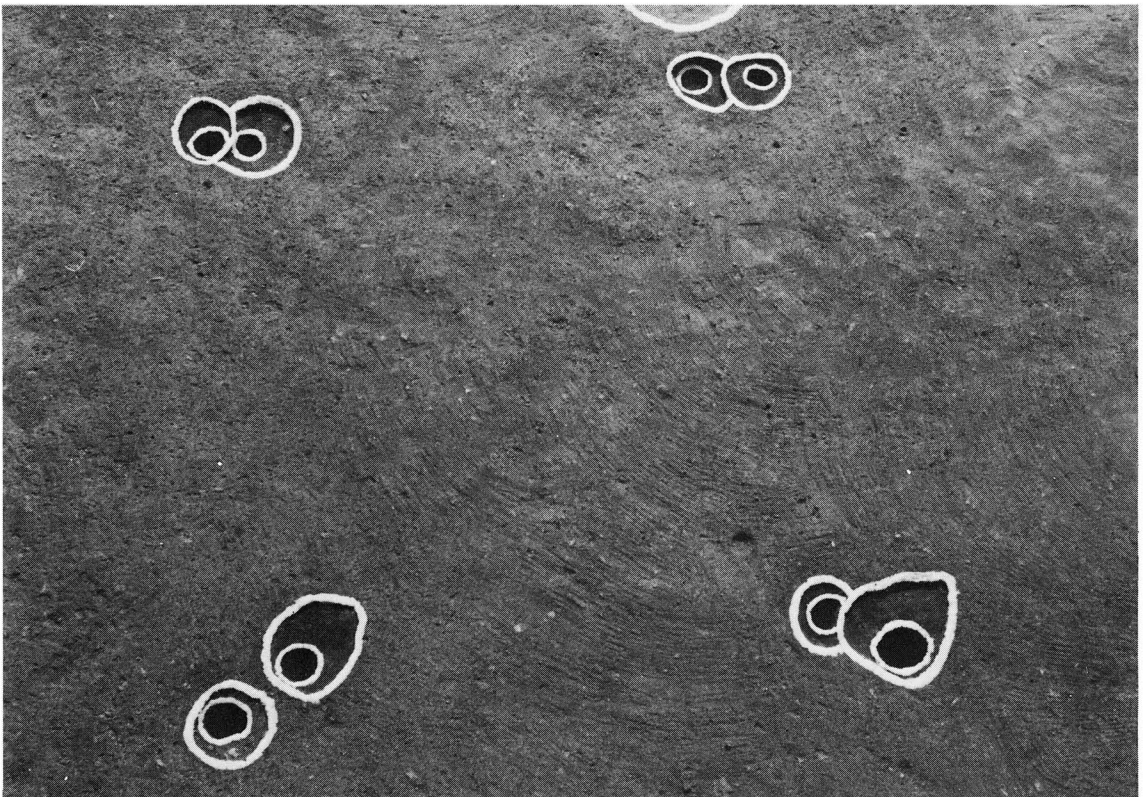
SB01とSB02の間に位置する。SB02と同様の1間×1間の掘立柱建物で、長辺2.5m、短辺2mの長方形の平面形を持つ。1回の建替が認められ、新旧の建物の規模はほとんどかわらない。主軸はN-6°30'-Eで、SB01・SB02とは方向を異にする



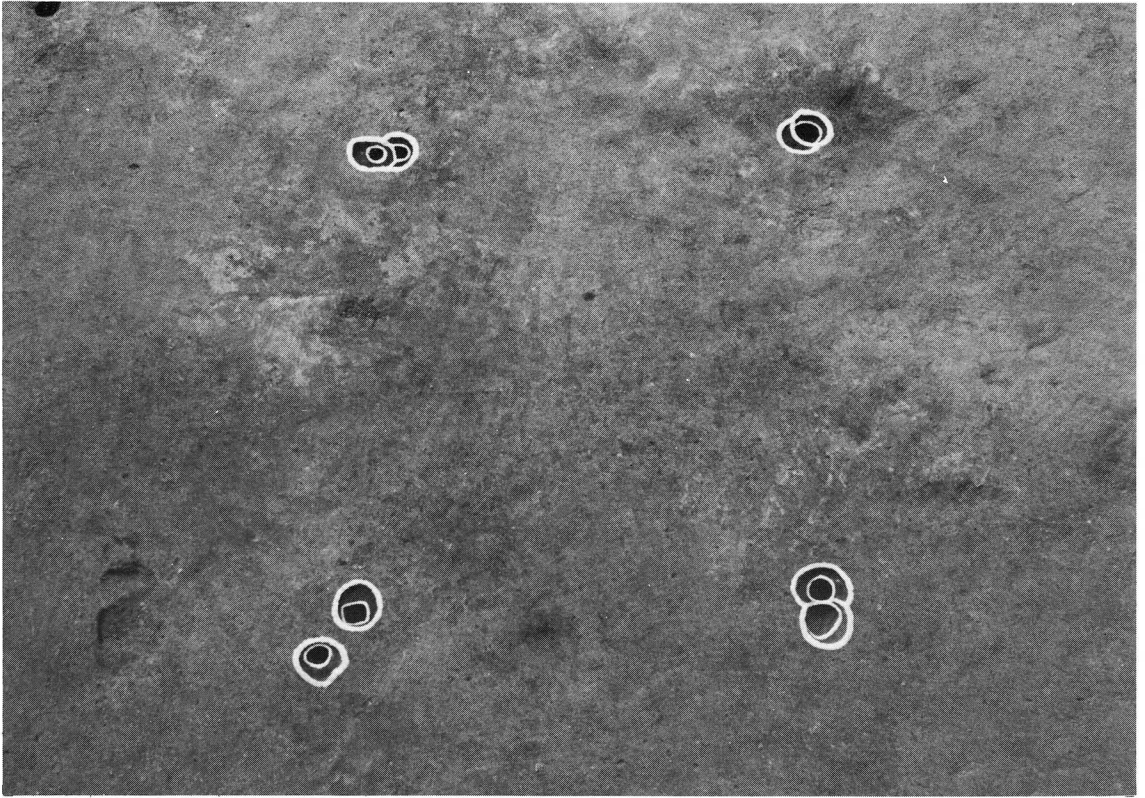
第5地区航空写真



豎穴住居 (SB 0 1)



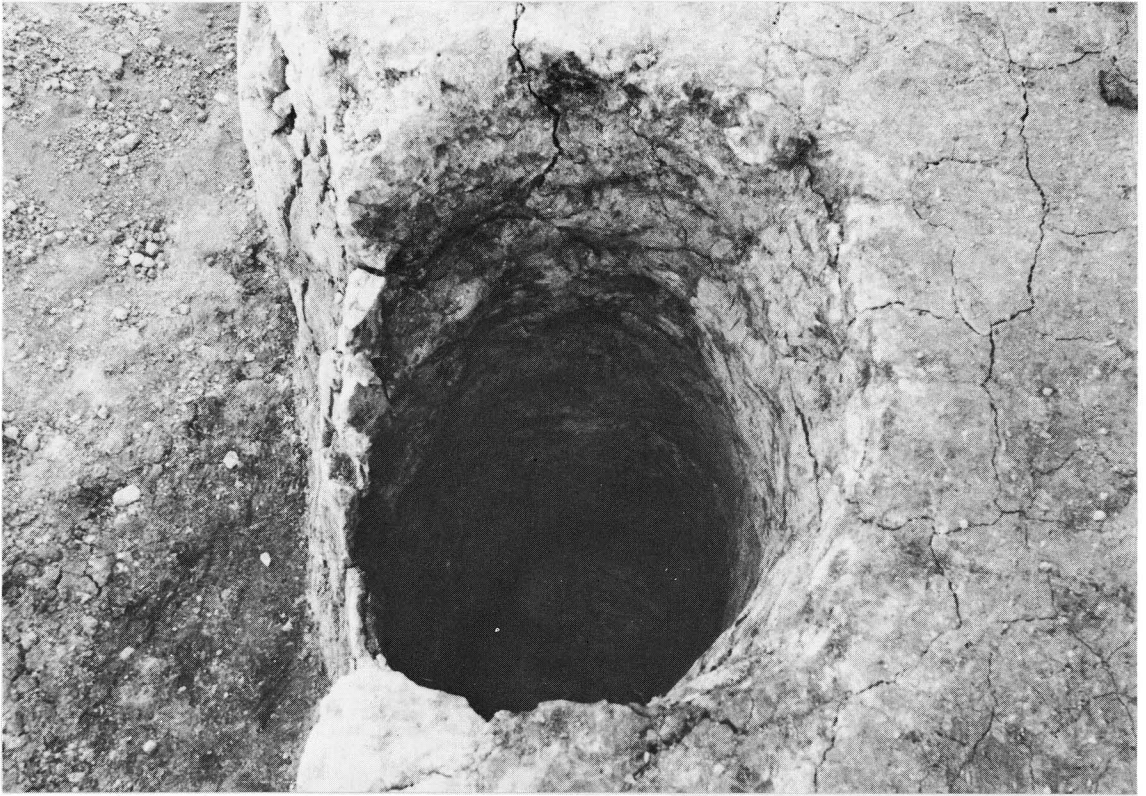
掘立柱建物 (SB 0 2)



掘立柱建物 (SB 03)



井戸 (SE 01)



井戸 (SE02)

井戸 (SE01)

浅い素掘りの井戸で径1.1mの円形の平面形を持ち、深さは約1mである。内壁はかなりえぐれていて最大径は1.3mをはかる。出土遺物には須恵器と土師器があつて、長脚一段スカシ高杯は埋土上部から出土したものである。土師器は高杯の杯部が出土している。

井戸 (SE02)

SE01のすぐ北側に位置し、SE01よりやや小さめの素掘り井戸である。平面形は径約90cmの円形で、深さ約1.4mをはかる。出土遺物は土師器のみで須恵器を含まない。小型丸底壺・高杯・甕などがある。

井戸 (SE03)

平面形は径1mの円形で、深さ約1.1mの素掘り井戸である。地山上に堆積した黒褐色粘質土から切り込んでおり地山面から切り込んでいる遺構とは若干時期が異なるものと考えられる。出土遺物は土師器甕胴部の破片のみである。



SE 0 2 遺物出土状況

土塚 (SK 1 0)

SE 0 3 の北西に位置する。径約90cmの円形の平面形を持ち、深さは約55cm、SE 0 3 と同様黒褐色粘質土から切り込んでいる。壁面は傾斜があまり強くなく断面は逆台形に近い。底面は平坦で、底面についていた状態で土師器甕が出土した。

土塚 (SK 2 9)

SE 0 3 の西、SK 1 0 の南に位置し、地山面から切り込んだ土塚である。平面形はややゆがんだ楕円形で、径約70cm、深さ約50cm、壁面は内側にえぐられており、底面は平坦に近い。底面についていた状態で土師器壺が出土した。

土塚 (SK 3 5)

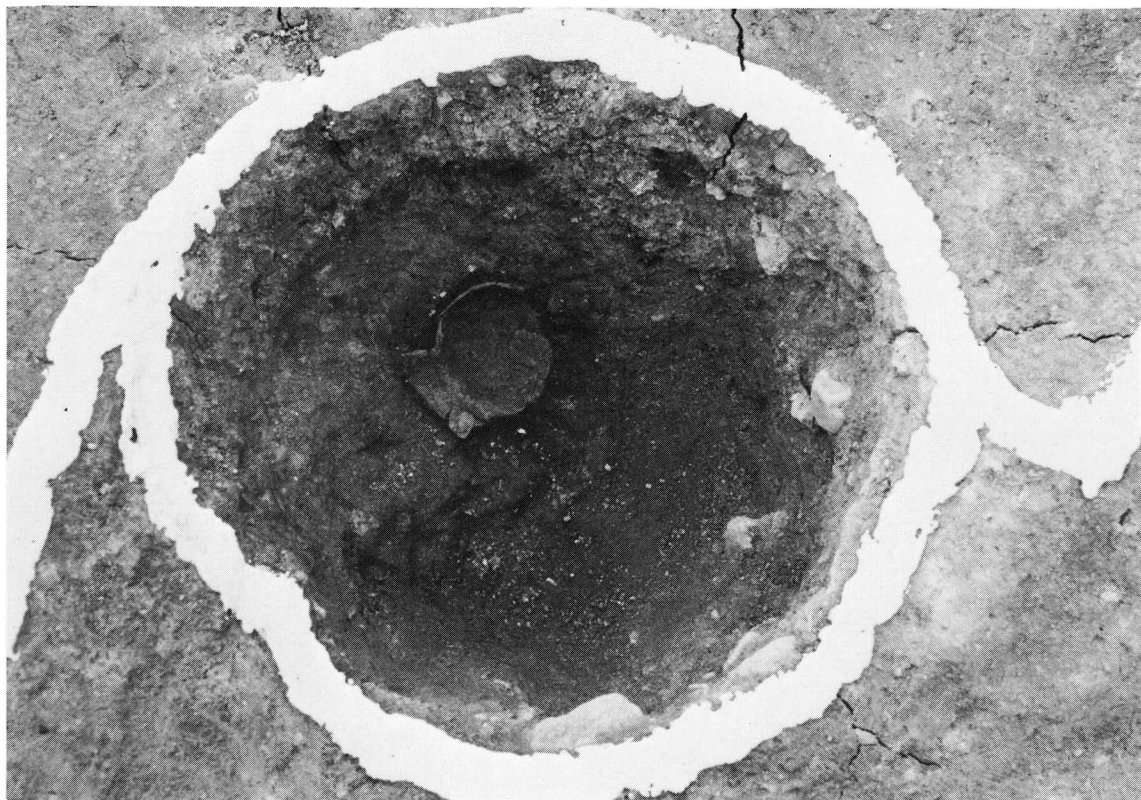
大型の不定形土塚SK 2 5 の南西隅に掘られている。長径41cm、短径37cmの楕円形の平面形を持ち、深さは約20cmである。埋土内より土師器小型丸底壺が出土した。



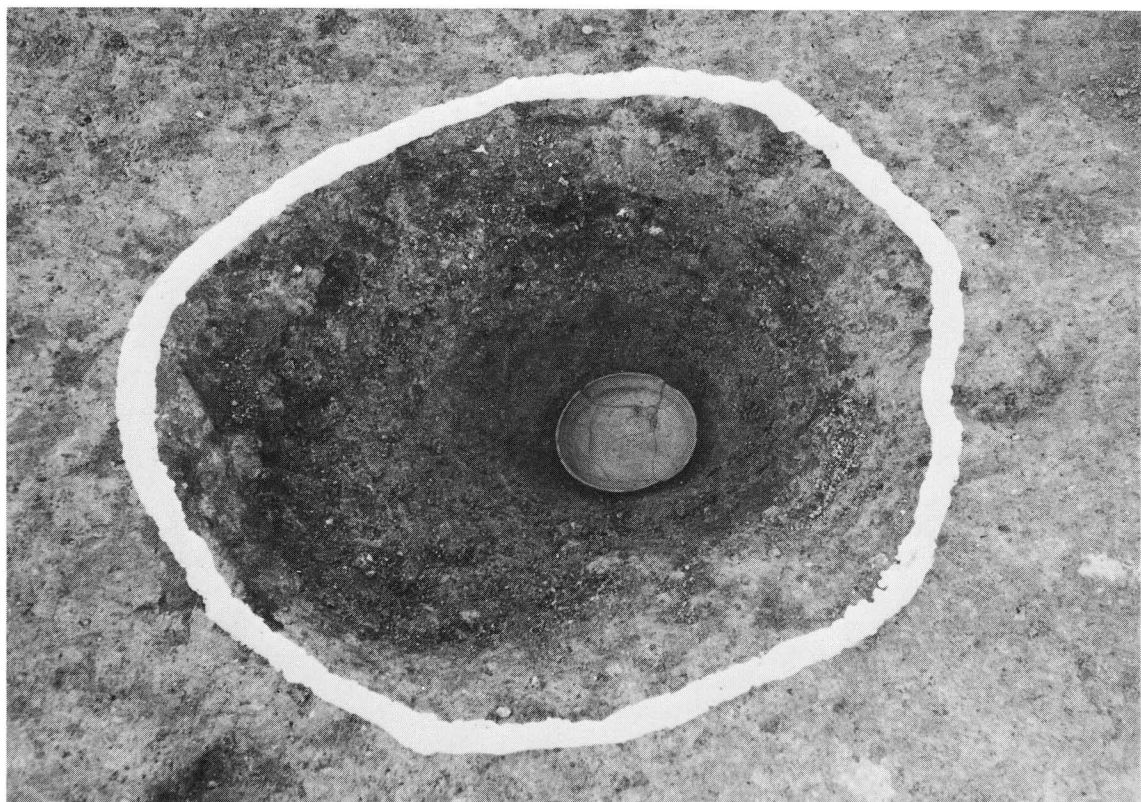
土坑 (SK10)



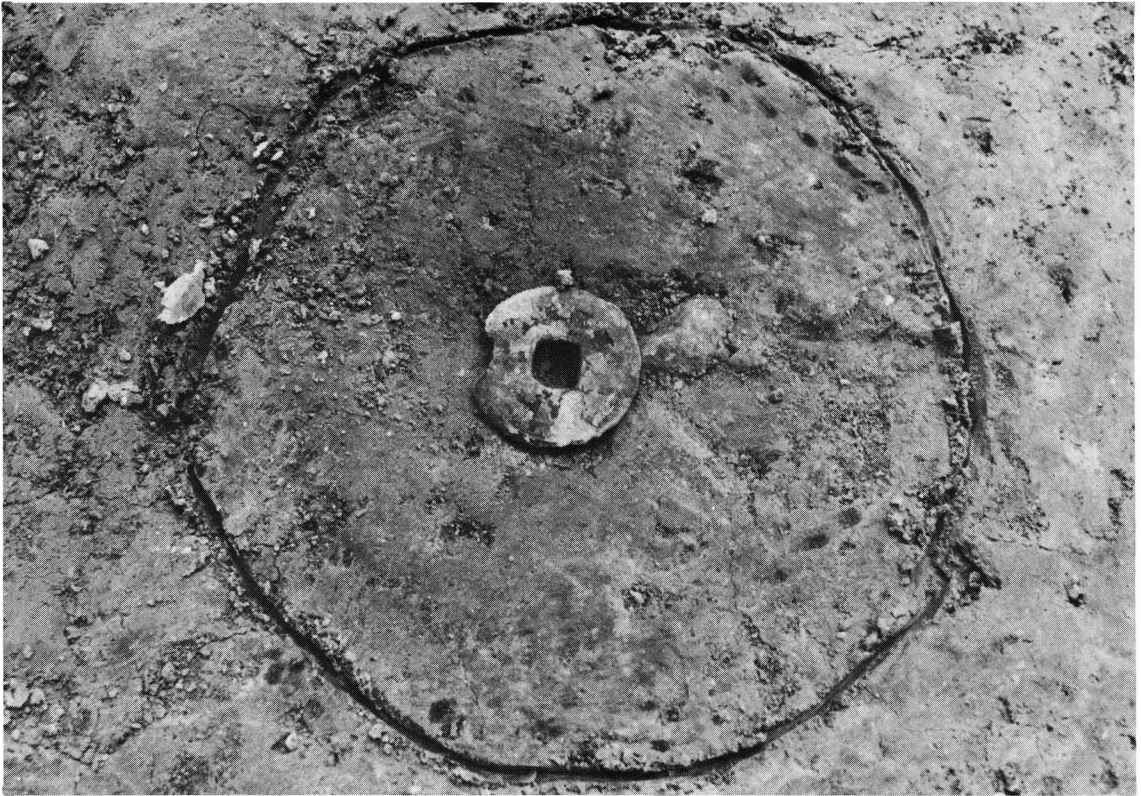
土坑 (SK29) 内遺物出土状況



土坑 (SK35)



土坑 (SK41)



古銭出土状況

土塚 (SK41)

平面形は径約70cmの円形で、壁面は上半部はかなりゆるやかで中央から下は傾斜が強くなる。底部中央に土師器皿が置かれていた。土層断面を観察すると中央に柱状に粘質の強い部分がみられるのでこの土塚は柱穴である可能性がある。とすれば土師器皿は柱をうけるような位置に置かれていたことになる。

耕作用井戸

計7基検出した。おおむね床土の下から切り込んでおり、旧畦畔付近に集中する傾向を持つようである。

杭列 (SA01、SA02)

南北方向に2列検出した。それぞれの杭列は1m～2mの幅をもってかなりの数が打ち込まれている。SA01とSA02の間隔は約13mである。



条里畦畔

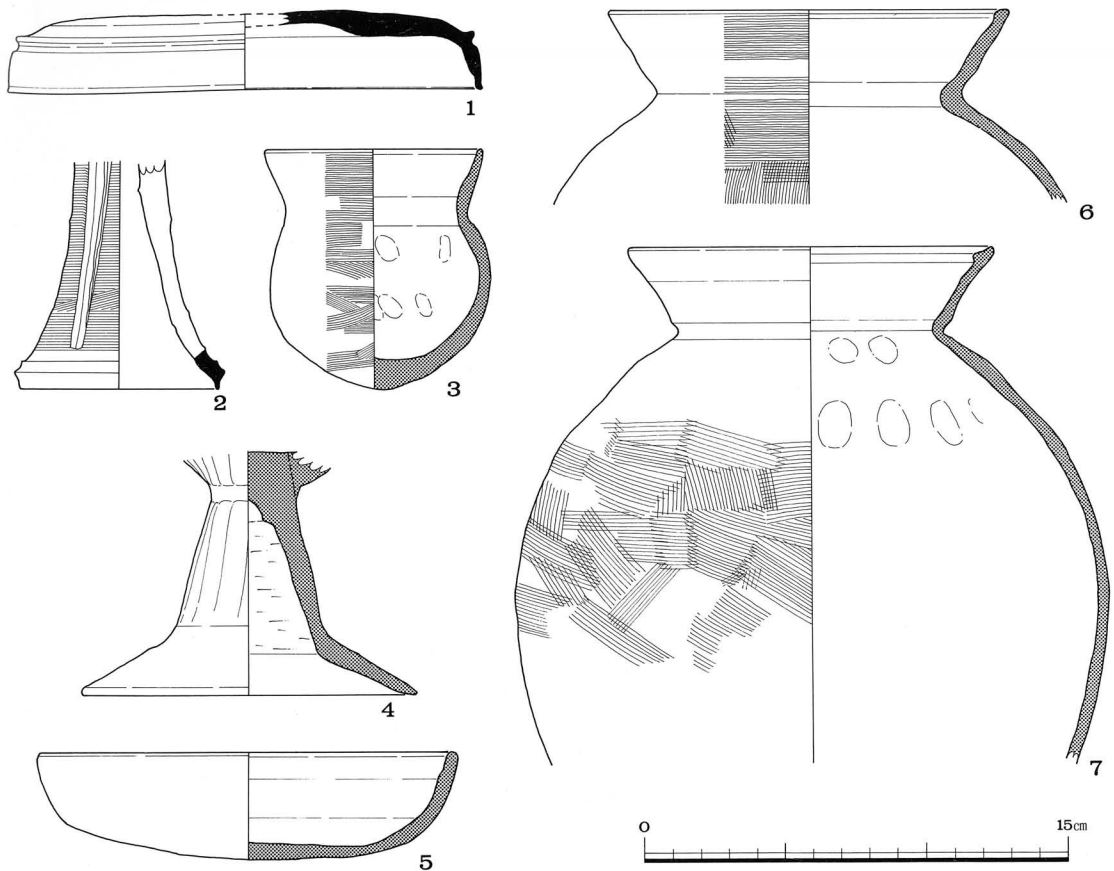
条里畦畔

調査区域の北壁及南壁の土層断面で確認した。畦畔は南北に走り、基底部で幅1.2m～1.3m、上面で幅0.7～0.8m、高さ約0.2mをはかる。周囲の堆積層に比較して堅緻で東側には溝状遺構が観察される。

ま と め

出土遺物は目下整理中であり詳細な検討は今後の課題であるが、現時点で調査成果を簡単にまとめておきたい。

古墳時代の遺構として竪穴住居1棟、掘立柱建物2棟、井戸3基、柵列、土壇などを検出した。掘立柱建物はともに1間×1間の小規模なもので柱も細く、倉庫というよりもむしろ納屋風の建物かと推測される。それぞれ1回の建替があるので、一定期間継続して生活が営まれたと考えられよう。井戸内より出土している土器には若干の時期幅が認められ最終的に埋ったのが6世紀段階としても、掘削の時期は5世紀と考えるのが妥当であり、



2-SE01 3・4・6-SE02 7-SK10 5-SK41 1-SE01又はSE02

第5地区出土遺物

竪穴住居・掘立柱建物もこれと相前後する時期の所産であろう。第1地区では6世紀代の集落が検出されているので、本地区の調査成果とあわせると5世紀から6世紀にかけて断続的に集落が営まれていた可能性が強いようである。

また今回奈良時代の遺構を検出することができたのは大きな成果であった。現時点ではまとまった遺構群はみいだされていないが、将来の調査に期待したい。

大和川・今池遺跡

発掘資料 その4

発行 大和川・今池遺跡調査会
発行年月日 1979.12.12
印刷 K.K 中島弘文堂印刷所

